

ノネコに干渉されていた産卵行動中のミシシippアカミミガメ

堀 貴明

300-0214 茨城県かすみがうら市坂910-1 かすみがうら市水族館

The red eared slider, while nesting, which two cats are showing interest on.

By Takaaki Hori

Kasumigaura Aquarium, 910-1, Saka, Kasumigaura, Ibaragi, 300-0214, Japan

2021年5月8日15時40分、かすみがうら市水族館(茨城県)に来館者より「公園(水族館に隣接する歩崎公園)でカメが卵を産んでいる」という報告があり、確認に向かうとミシシippアカミミガメ(以下アカミミガメ)のメスが後肢で土を埋め戻している様子が確認された。来館者によると、水族館に入館する前の15時頃には卵を産んでいたとのことで、その時の様子を写したスマートフォンの写真も見せてもらった。来館者と共にしばらくアカミミガメを観察していると、公園付近に住んでいるノネコ(褐色)がやってきてアカミミガメに近づいてきた。アカミミガメのすぐ近くまでくると興味を示した様子で、顔を近づけにおいを嗅ぐ、甲羅を前脚で何度も叩く等の干渉を行った(図1)。その間、カメは逃げ出すことなく穴の埋め戻し作業を続けていた。しばらくするとノネコ(褐色)はその場を離れていった。その5分後、別のノネコ(白と灰)がやってきて、カメの周りをしばらくウロウロしていたが、2~3分ほ

どでその場から去って行った。16時2分に館内作業のため、観察を切り上げて戻ったが、16時38分に別の来館者から「カメが歩いている」と言われて確認に向かうと、先程のアカミミガメが歩いていたので、回収して公園内の池に設営されている淡水ガメ用の囲いの中に收容した。なお、後日(2021年5月10日)、産卵巣を確認したところ、卵数は7個であった。

日本におけるアカミミガメ産卵の記録は各地で報告されており、茨城県においても坂東市のミュージアムパーク茨城自然史博物館敷地内にて、同種の産卵が報告されている(早瀬, 2008)。しかし、日本において野生下でのアカミミガメの産卵を開始から終了まで詳しく観察した報告や、産卵行動に関する研究はほとんど発表されていない。ウミガメに関しては産卵行動が開始から終了まで類別されており、一連の産卵行動は(a) 上陸, (b) ボディーピット掘り, (c) 穴掘り, (d) 産卵, (e) 穴埋め,



図1. 埋め戻し中のアカミミガメ周辺の匂いかぐノネコ

(f) カモフラージュ, (g) 帰海の7つに類別され(松沢, 2012), このうち(d)の段階まで進むと, 以降は人が近づき観察しても最後まで産卵行動を行うとされる(環境省, 2007). 今回ノネコに干渉されていたアカミミガメは上記の類別では(e)または(f)の段階に相当するものと考えられた. 今回の観察結果からアカミミガメもウミガメ同様に産卵後に外部から干渉があっても産卵行動は継続するということがわかり, 興味深い.

引用文献

- 早瀬長利. 2008. 茨城県自然博物館野外施設におけるミシシippアカミミガメの産卵記録. 茨城県自然博物館研究報告 (11):21-23.
- 環境省. 2007. 足跡の判読と産卵個体への注意. p.26. ウミガメ保護ハンドブック. 環境省自然環境局, 東京.
- 松沢慶将. 2012. 繁殖生態—交尾と産卵. p.115-140. 亀崎直樹(編) ウミガメの自然誌—産卵と回遊の生物学. 東京大学出版会, 東京.

足立区におけるニホンイシガメの記録

辻井聖武

190-0022 東京都立川市錦町2-1-22 株式会社 自然教育研究センター

Records of *Mauremys japonica* in Adachi, Tokyo

By Masamu Tsujii

Center for Environmental Studies, 2-1-22, Nishiki-cho, Tachikawa, Tokyo 190-0022, Japan

東京低地に位置する足立区は, 淡水棲カメ類の生息状況を記録した資料が極めて少ない. ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (以下, イシガメ) の生息に関する情報もなく, 有識者への聞き取り調査からも見たことがないとの返答が多かった. ところが2014年の区内の広域的な調査からクサガメ *M. reevesii* との交雑の疑いがある孵化幼体が記録され, イシガメの生息の可能性が示唆された(辻井, 2021). その後, 足立区内でのイシガメの生息状況を調査してきた結果, 新たに3例のイシガメが確認されたのでここに報告する.

1例目は, 2019年6月22日の18:00過ぎに2014年に実施した生息状況調査の対象調査地点である河川付近の陸上で発見された(図1a). 確認場所の詳細は, 過度な採集や別地域への移動を避けるため伏せておく. 個体は僅かながら成長停止線が認められ, 1歳の幼体と推定された. 尾の欠損はなく, 背甲長はおよそ5cmであった.

2例目は, 2020年6月18日の11:00~12:00の間に1例目とは別地点で目視によるルートセンサスの調査時に確認された. 個体は抽水植物の間を遊泳しており, しばらく水面から頭部を出していた. 捕獲ができない距離にあったため, 高倍率ズームが可能なデジタルカメラ(SONY α77; SEL70300G)にて撮影した(図1b). 個体は外見上, イシガメと判断した.

3例目は別地点で2021年10月3日の12:00~13:00の間にルートセンサスの調査時に確認された. 中州で日光浴をしているところをデジタルカメラで撮影した(図1c).

1例目(2019年)の確認個体は幼体であったため, 野生由来であれば前年にイシガメと思われる個体から孵化したものが越冬後に現れたと推測される. 発見場所付近で孵化した幼体なのか上流域から流入してきた個体かは不明である. また, 飼育由来であれば, 屋外で飼育されていた個体が